

市立伊丹病院 老年内科

伊東 範尚

(日老医誌 2020; 57: 492-495)

当科について

伊丹市は兵庫県の南東部に位置する、大阪府に隣接した人口20万人程の市で、市内には大阪国際空港（伊丹空港）や大企業、工場などがあると同時に、池や公園、住宅地が広がる住みやすい街です。兵庫県の中では比較的都市部にあり、高齢化率は約25%と兵庫県や全国の平均と比較するとやや低い方ですが、他地域と同様に人口の高齢化の影響は大きく、生活機能や認知機能の低下した独居の高齢者など、老年科の診療対象として重要な方が大勢おられます。

市立伊丹病院は1957年に開院し、順次増床され、現在は414床の急性期総合病院として伊丹市の中心部にあります。二次救急医療機関であり、年間1万人以上の救急患者を診療し、新入院患者は1日約30人、その3分の1が緊急入院となっております。高齢化を反映して全入院患者の平均年齢は70歳程度であり、最近10年間で約5歳高齢化が進みました。

老年内科は大阪大学老年・総合内科の楽木教授の力添えもあり、現在も主任部長をされている中村好男先生を中心に、2011年に内科の一部門として新設されました。筆者は2018年に赴任しております。老年内科の必要性、重要性は言うまでもないですが、大学病院ではなく市中の急性期総合病院で老年内科がある病院はまだ少なく、新聞などでも取り上げられ注目されています。高齢者の多様な疾患を入院・外来で診療するとともに、いくつもの多職種チームのメンバーとして病院内で他科や他職種と連携しています。また、中村主任部長と筆者は病院の地域医療連携室を担当しており、老年科として重要である地域や開業医の先生方との連携にも力を入れています。

す。

現 状

老年内科として入院病床を16床担当しています。市中病院であることから肺炎や腎盂腎炎などの感染症、慢性心不全や生活習慣病の悪化などの入院が多いですが、全身倦怠感や食思不振など老年症候群が背景と考えられる主訴も多いです。また、救急病院としてできるだけ患者を断らない診療をしているため、入院患者には認知機能の低下した高齢者や施設入所中の認知症患者も多数おられます。また緊急事態宣言の発令前から、市内の介護老人保健施設で新型コロナウイルスのクラスター形成が認められ、当初から病院としてコロナ患者の入院を受け入れており、現在に至るまで発熱外来なども担当しております。

人生の最終段階におられる方も多く、積極的な治療だけでなく、緩和的なケアや穏やかな看取りが必要と考えられる入院患者もおられます。また、医療や介護が必要な状態でありながら、それらに繋がっていない、あるいは拒否されている患者や家族もおられ、それぞれの背景を考えながら、医療や介護の環境づくりを行う場合もあります。

家庭から入院された患者だけでなく、施設入所中の超高齢の患者であっても患者自身や家族のAdvanced Care Planningの不十分な方は多く、各々の考えや気持ちを汲み取り、それを地域の先生や施設へお伝えすることもあり、日々考えながら診療を行っております。

当院のような急性期の市中病院が大学病院や慢性期病院、施設と大きく異なる点の一つは、入院までは認知機

市立伊丹病院老年内科

連絡責任者：伊東範尚 市立伊丹病院老年内科〔〒664-8540 伊丹市昆陽池1-100〕

doi: 10.3143/geriatrics.57.492

能低下や生活障害があっても何とか生活が成立していた患者が、発熱や骨折などを契機として突然入院するケースが多いということです。そのため入院後に急にせん妄や認知症に伴う症状が出現したり、認知機能の低下や生活障害に家族が初めて気が付くということが多々あります。患者本人、家族に病識や予備知識がない状態から退院に向けての医療や介護などのサポートを整えるという仕事は、一般の病院では看護師や地域医療、MSWなどが行うことが多いと思われませんが、場合によっては我々老年科の医師主導で進めていくことでスムーズにいくこともあり、地域医療連携室の後方担当とも協力して行っております。また今年から精神科の常勤の先生が一人赴任され、負担が少し軽くなりましたが、それまでは病院全体の高齢者のせん妄、認知症状を老年内科単独で診療しており、現在でも多数の患者を共観あるいは多職種チームとして診療しています。

外来では老年内科専門診、もの忘れ外来、総合診などを行っており、老年症候群や生活習慣病などの高齢者疾患の診療を行っております。特に認知症の新規鑑別診断は年間200例以上となっており、近隣の医療機関からたくさん紹介いただいております。そのため他病院と同様、もの忘れ外来の受診待ちが長くなり、短縮化が喫緊の課題と考えております。伊丹市には認知症患者の診療や相談に協力的な医療機関として認知症かかりつけ医療機関というリストがあり、その他にも認知症サポート医として協働していただける地域の先生方も増えていることから、素早く診断、治療、サポートを行える体制づくりを目指しております。

高齢者への取り組みは病院だけでなく、伊丹市としても迷子になる認知症高齢者などを見守るために、市内にビーコン受信器やカメラを整備し、位置情報を家族などに知らせる「安全・安心見守りネットワーク事業」(日本初)を展開しています。申請をすれば無料(費用は市負担)で利用可能となっており、徘徊などの行動・心理症状(BPSD)が出ている患者に対して早期に介護体制を作り上げることができ、老年科として心強い環境です。

また、伊丹市には古い町並みと同時に、昔ながらの人間関係も残されており、認知症などで医療にも介護にも繋がっていない孤独死予備軍とも呼べる高齢者を、近所の方や民生委員さんなどが気にかけて当科や地域包括支援センターに連れてきていただくこともあり、地域の力を実感することもあります。

現在の取り組み

高齢者医療は医師が頑張るだけでは難しい分野であり、多職種との協働が重要です。当院においても、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、栄養士などと一緒にチーム医療を行っております。転倒予防チームは週1回病棟を回診し、転倒リスクが高い入院患者に介入を行っている他、影響レベルの高い転倒が起こった際にはすぐに臨時回診を行っています。また、市民講座を開き転倒予防の意識付けを病院外にも広めています。認知症ケアチームは週1回病棟を回診する他、老年内科医師と認知症認定看護師が毎日のように病棟で起こるせん妄や認知症に伴うBPSDに対応しています。また、職員や外部向けの認知症ケアの研修会なども行っております。ポリファーマシー対策チームは週2回検討会を行い、多病にともない多剤併用になりやすい高齢者の投薬に関して主体的に介入しております。特に、整形外科病棟ではorthogeriatric co-managementの観点から、入院前から積極的に介入し(ERAS外来)、高齢者に多い転倒による骨折患者は全例、共観のもと薬剤調整を行っております。リエゾンチームは週1回検討会と病棟カンファレンスを行っており、職員の意識向上も目指しております。どの多職種チームもそれぞれの職種の強みを出し合うことを意識しながらより良い医療を提供するように心がけております。

10月1日からは念願の院内デイケア・デイサービスも開始します。急性期病院の入院患者においては認知症に伴うBPSDやせん妄のため、身体疾患の治療が円滑に進まず入院が長引いたり、過剰な身体拘束を受けてADLが低下することが現実として存在します。院内デイは、せん妄やADLの改善に寄与することを目的としています。また、退院前に環境整備を行っても、患者本人のしり込みや消極的な家族の存在によって、退院後に介護サービスにつながらず、早期に再入院となってしまうことがあります。院内で慣れておけば退院後にスムーズに介護サービスを利用できるようになり、再入院を抑制できると考えています。さらに、院内デイ中の高齢者や認知症患者の生き生きとした表情を引き出すことにより、高齢者医療において物理的拘束以外にも薬剤や環境による拘束に頼ってしまいがちな医療者の意識を変えることも目的としています。



老年内科医と多職種チームのメンバー

老年内科医は前列向かって左から2番目(尾崎和成)3番目(中村好男)4番目(筆者)5番目(山本博子)敬称略

当科の強み

当院の老年内科医4人は全員が老年病専門医ですが、老年病以外にも多くの分野(総合内科、循環器、高血圧、腎臓、プライマリケア、睡眠、東洋医学、抗加齢医学)の専門医です。これは当科の医師の経歴が多様であるからなのですが、多病である高齢者を診療する老年科医にとっては大きな強みです。研修医やレジデントの指導においても、専門分野からの視点では見逃し易い問題点に気づき、老年科医としての視点を伝えるために役立っております。

また当院は女性医師、特に産前・産後、子育て世代の女性医師が働きやすい職場となるようにサポートしたり、多様な働き方などを提案するなど柔軟に対応しようとしております。病院全体でも女性医師は多いですが、老年内科でも小さい子ども達がいる女性医師が活躍しております。

今後について

2020年10月1日に地域型の認知症疾患医療センターに指定され、認知症医療提供の拠点としても活動していきます。他の認知症疾患医療センターでは精神科や神経内科が主体のことが多い中、当院は老年内科が主体となっており、その特色や強みも反映していきたいと考えています。今後、精神科・神経内科も拡充していく予定であり、認知症の患者や家族が困っている認知症状やBPSDなどに関して、診療、サポートを機動的に行い、認知症救急診療の拠点となるようにと考えています。

また現在、当院は400床あまりの市立病院ですが、数年後には市内の病院を統合し600床以上の市立総合医療センターとなる予定です。現在、新病院統合に向けての青写真を描いており、そこでも老年科の存在感が強くなるようにしていきたいと思っております。特に、老年科のハイボリュームセンターとして、次世代を担う老年科医を勧誘し、教育することが重要と考えており、魅力的な科として興味を持ってもらえるように頑張ります。

最終的に高齢者や認知症患者と家族が安心して生活で

きるように、老年内科と多職種のメンバーで切磋琢磨していきたいと考えています。

最後まで読んでいただきありがとうございました。読

者の皆様方には、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしく
お願いいたします。